万田作業所が優勝！

にぎわう団結ソ球大会

四月二十五日、炭労が春闘で第二波のストライキ（二十四時間）に突入した日、三池労組は〝春闘勝利団結職場対抗ソフトボール大会〟でにぎわった。

十六チームが参加。たくさんの家族も応援にかけつけ、別項のスコアが示すように、文字通り優勝戦にふさわしい熱戦を展開。チームプレーにまさる万田作業所チームが、わずか一点の差で優勝の栄冠を獲得した。

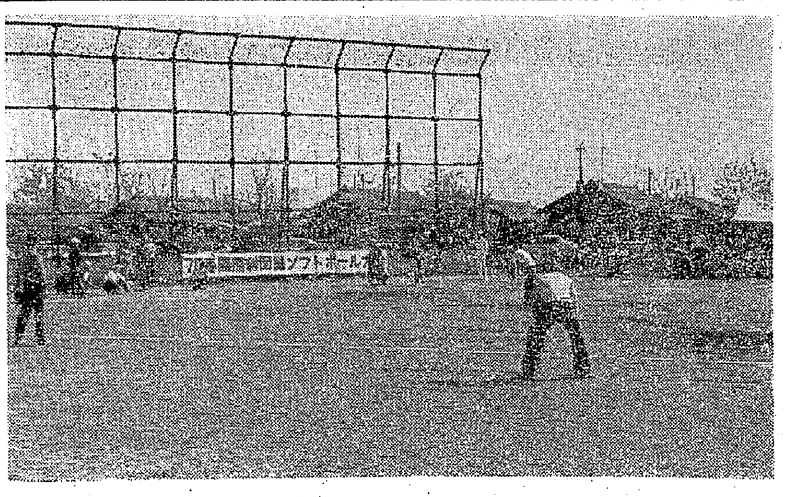
この日は、三池労組員の春闘への決意を反映、重なって演じられる美技が幾たびとなく割れるような拍手を呼んだ。たとえば相手チームの打者を、三振でなで切りする投手に舌をまき、二回転、三回転しながらも飛んできた白球をちゃんとグローブにおさめていたり……。

前日の悪天気から、この日の開催があやぶまれたところ、案に相違してこの日はからりと晴れあがった好天気。久々の催しに、グラウンドコンディションは絶好とあって、プレーに力がはいり、試合する人も見る人も心は晴れば れ。またとない一日となった。

新港と四山の両グラウンドに分かれ、試合はそれぞれのグラウンドでまず朝八時から決起集会を開き、春闘への決意を固めたあと、トーナメント形式で進行。

優勝戦は新港グラウンドで、それぞれ勝ち残った三川丙方と万田作業所の両チームによって争われた。

三川丙方	3	4
万田作業所	5	1



応援の喚声のなかでの大試合

職場新聞活動の現状と課題

森一作氏の話から

三池労組は四月十二日三川指導部で、特に日本機関紙協会九州地方本部から森一作事務局長を招き、「職場新聞活動の現状と課題」について話してもらった。職場新聞・地域新聞活動を強めるうえで、役立つことが多いと思う。お話を要約して次にお伝えする。

共感を組織しよう

事実を正確な記事にして

「ほしがりません、勝つまでは」の太平洋戦争頃までの〝情報かくし時代〟に比べ、今は情報過多時代。三十万世帯が、カラーテレビをもち、NHK調べによれば、国民は毎日三時間十九分テレビを見る。

それは一方的な報道。ほとんどの家庭は、そのテレビ番組に合わせて生活のリズムをつくっている。

ほかに、書籍や雑誌、新聞がある。もっとも、テレビのコマーシャルで知ったからといっては、本を買うことも多くなった。その陰で、資本はがっぽりもうける。

生活も、かみながら食う米食から、すする食料へ。その食料の六〇%は輸入。こんな事態は、わが国の歴史上初めて。

マスコミが大きく以上の傾向を推進している。

表面的な現象だけを伝えて、本質は常に巧みに隠してゆく。結果だけで、原因はそっちのけ。まさに総白痴運動の推進者だ。

物ごとを追求する、人間に大切な思考力がそこで奪われてゆき「みんな私が悪いのよ」のなかにおち込んでゆく。原子力エネルギーの時代に、屋うらない。

機関紙や職場新聞はマスコミと違って、読者が主人公。あくまで働く者の観点から、少くとも将来への展望をもちながら、系統的にものごとを追及してゆく。三池の存在意義が明らかにしている――「やがてくる日に」だ。

つくる新聞の内容も、働く者の生活を全面的に反映した豊かなもの、多様性こそ大切。身のまわりにころがっていることに目をむけること。すべてはそこから始まるもので、そこに共通性・統一性・階級的連帯がかくされている。

新聞である以上、当然機敏性が求められている。

記事は、書くものの意見ではなく、事実を正確に伝えるべきで、それには足で書く覚悟を。人に接して取材したり、事実を調べたり…。要するに、読者が判断するための好材料を提供する。

忘れてならぬのは指導性。それは事実を選択する姿勢のなかにある。

機関紙・職場新聞は、何といってもわかり易い文章であることが先決。電報の文が教えるように、ムダは省略し、中心点を明確に。要は簡潔な文章であること。

見出しは、記事の中心点をひき出すことで、読む者がパッと飛びつく魅力ある言葉を使うこと。必ずカナを入れなければならない。高校の書物でも、使われているのは漢字三割にカナが七割。

労働者がつくる新聞は、つまるところ読者の共感を組織するところからはじまるのである。

ならぬものとなっている。

写真上は、三川指導部前のアピール。左は日刊紙配り。

拝啓 瀬戸口係長殿

これは四山指導部六分会新聞〝とりで〟（四月二十七日発行）が、「瀬戸口係長殿」にたてまつった口上。

拝啓

あなたは日頃現場に働く労働者や係員に対して、非常に高圧的で口やかましく言っておられますが、どう思っておられるのでしょうか。

先日もひと休みしている作業者に、「お前どま、なんぼしよっとか」と言ったり、懸命に仕事の段取りをしている係員のことを、「あいつばぐずで仕事がさばけん。そるけん、いつもやりくらるるとだ」、といわれていました。

今職場では、あなたのそういう態度に、大変な不平不満が出ていることをご存じでしょうか。

鉱が全面的に推し進めている近代的労務管理の一つ、ZD運動にうたってある要領や精神にはまったく反する、前近代的なあり方ではないでしょうか。

今後今までのような言動や態度が続けば、必ずや労働者の不満が爆発する事を告げ、あなたの猛省をうながします。考えて下さい。

敬具

悲しみを共に

こんどの宿久重春さんの痛ましい災害死（一面記事参照）について、三池労組は全職場をあげて冥福を祈ったが、同じ三川鉱に働く三川指導部第一分会は、その新聞〝みちび〟（四月二十六日発行）で、次のように哀悼の意を実した。

「合理化の犠牲です。新労四分会の皆さんと悲みを共にし、哀悼の意を実します」

ZD標語

Z　ぞーッとするような
D　デタラメ農政。

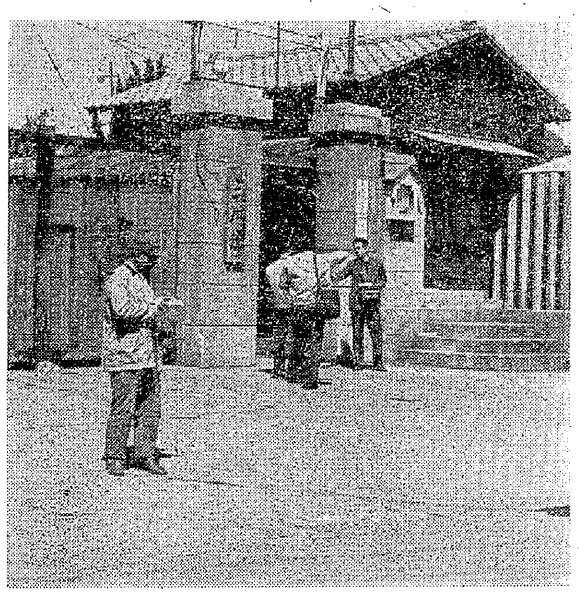
×

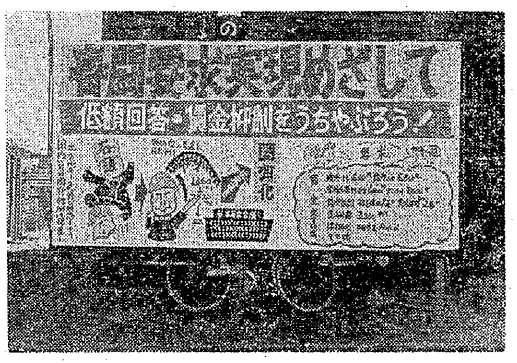
前　まえからいおうと思っていたが
チ　ちっともやらない実質保安
エッ　越冬過ぎたら
ク　くるしい高温。

……

三川九分会新聞〝よあけ〟（四月二十六日発行）から。

自　自分で見よう、考えよう。みんなのためになることを。
主　主人の安否を気づかう妻に、笑顔で返そう健康を。
保　保守がやってる無茶苦茶政治。革新（確信）もって取り返そう。
安　安らかに眠ってくれ、と会社はいうが、どうして眠れよう殺されて。





日刊紙で呼びかけ

三川指導部が毎日

▼…三川指導部は、春闘がやってくると同時に〝日刊みかわ〟という日刊新聞を発足させた。毎年のことながら、春闘となると日刊紙は三池労組員ばかりでなく、三池新労組員や下請労働者にとってもなくてはならぬものとなっている。

なぞなぞ

▼…「大幅賃上げ、とかけて何と解く？」

×

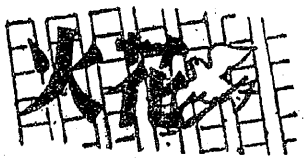
答えの一
タコあげ大会、と解く。
心は「あがればあがるほど、よい」。

答えの二
チャンピオンベルト、と解く。
心は「闘いとるもの」。

（港務指導部一分会新聞〝きかんしゃ〟〈四月二十四日発行〉から）

さっそく広げたい 三池の闘いの火

兵庫　高嶋　久治



拝啓。

桜前線もようやく東に過ぎ去り、春闘は決戦の段階を迎えました。沈滞ムードの中で何とか壁を突き破るとの戦術で、私達交通運輸の仲間は頑張っております。

先日は、ほんとうに大変ご迷惑をおかけ致しました。お蔭さまで貫労組の、凄烈な闘いの跡を存分に拝見させていただきまして、三池闘争当時のことを思い起こしました。

帰ってから国鉄労組高砂支部の青年部長らに、ご案内いただきました所等を話させていただきましたが、昨今の若い仲間は三池の闘いについては実感がありませんので、学習などのとき勉強するように話しました。

この春闘での皆さんのご健闘をお祈りすると共に、CO患者仲間のご多幸を祈念してお礼とさせていただきます。組合員皆々様に、何卒よろしくお伝えください。

×

高嶋さんは国労大阪地方本部高砂支部の活動家で、お住まいは、「兵庫県高砂市高砂町 鍵町 七六八」です。ありがとうございました。